

2024 年度 日本インターンシップ学会 東日本支部 第2回研究会報告

報告者 山本 美奈子（東日本支部 運営委員）

2025 年 4 月 30 日（水）、オンラインで開催された第2回研究会では、「大学・学生とインターンシップ受入先をつなぐ中間支援組織の取組」をテーマに、全国の大学教職員、企業、NPO 法人など 16 名の皆様に参加いただきました。

第2回研究会では、東北地区の中間支援組織として活躍されている一般社団法人ワカツク代表理事の渡辺一馬会員をお招きし、「学生と東北をつなぐ地域コーディネーターの活躍」をテーマに事例報告が行われました。渡辺会員は、大学卒業と同時に起業され、「課題解決型の人材を育成する」ために「若者が挑戦できる環境を東北につくる」ことをコンセプトに、長期実践型インターンシップや復興関連プロジェクトなど、産学官が連携し、地域に根差した取組みを精力的に行っておられます。

冒頭では、東北の 300 の地域企業、50 の地域団体と全国の若者 10,000 名以上を「課題解決」の現場につなぐ中間組織としての役割を担い、その結果、起業家 50 名以上、東北が好きになった若者 1,000 名以上、地域コーディネーター団体 20 以上の成果につながったとお聞きし、規模の大きさと活動範囲の広さを感じました。首都圏などの都市部では、インターンシップの専門部署や中間支援団体などが増加していますが、東北地方では支援体制が少ない状況です。さらに、東日本大震災以降、東北地方では人口減少と若者流出が深刻化し、労働力不足が地域経済や産業の衰退につながる悪循環に陥っています。こうした課題に対し、ワカツクが全国の学生を巻き込み、地域企業と共に課題解決に挑むという取組みは、大変魅力的だと感じました。

質疑応答では、「課題解決型の人材を育成するといっても参加する学生がすべて、企業の課題解決に対してアイデアを出してくれるわけではないのでは?」、「都会から参加した学生が、現実の厳しさを目の当たりにして、リアリティショックで泣き出すのでは?」などの質問がありました。渡辺会員からは、地域コーディネーターが企業に対し、『学生の参画は貴重な機会になるが、学生の参加によって課題がすべて解決するわけではない』と、丁寧に説明し現実的な期待値を調整する重要な役割を担っているとの説明がありました。また、やる気のある学生が意欲を持ち続けられるように、企業には、体験型や実践型のプログラムを設計してもらうこともポイントとのことでした。そして、「学生のつまずきに関しては、しっかりとリフレクションし、言語化する。学生同士、地域の方と学生、企業と学生、地域コーディネーターと学生など、多くの方が学生と関わり、学生自身が言語化をして乗り越えていく」、これをカリキュラムのなかに落とし込んでいく。それが長けているのがワカツクの強みであるとのことでした。東北に思いを寄せる人が 1,000 名以上いることの意味を実感した瞬間でした。

今回の事例報告は、地方圏における共通した課題に対し、大変参考になる内容でした。地域の産学官連携の好事例として、関係各所の皆様に、ぜひとも耳を傾けていただきたい、示唆に富む研究会となりました。

